
神様たちと麻雀打ったらISの世界に転生ってどうよ.....?

嶺上開花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様たちと麻雀打ったらISの世界に転生ってどうよ……？

【Nコード】

N8215Z

【作者名】

嶺上開花

【あらすじ】

海で友人と戯れてたら足がつって死んだおれは、人数あわせと言う名目で宗教も国も違う神々の麻雀に付き合わされる。そこでなぜか転生の話になった結果、おれはISの世界にFate/zeroのバーサーカーことランスロットさんの能力『騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』を有して転生した。はあ、めんどうだ……。死にたくなってくる。

まさか、アマテラスがひきこもりだったなんて……（前書き）

完璧に作者の趣味全開なISの二次創作。
いくじえ！？

まさか、アマテラスがひきこもりだったなんて……

い、いま目の前で起こっていることを話すぜ……。

いいか、心して聞けよ？

おれは今、倫理の教科書や、聖書などなどに名を連ねる神々と麻雀を打っている。

「ポン」

おれがすてた「中」をポンした北風にいる神——北欧神話内に登場する、戦争と死の神、オーディン。その無精ひげ、鬱陶しくないですか？

「どうしたの人間。あなたの番よ？」

おれの正面——西風に位置するは、日本の神話の最高神であるアマテラス・オオミカミ。ちなみに滅茶苦茶美人だ。

本来ならばここで美辞麗句の限りつくしてその美しさを表現すべきなのだろうが、今のおれにそんな余裕は無い。

詰んである牌を取る手が震える。こりゃあ、チョンボ（麻雀でいうところのお手つき）しかねないな……。

「ふっ……カン！ ツモ！ リンシャンカイホー 嶺上開花、ツモ、タンヤオ、イペーコ
ー！ 4、000オール！」

「くっ……また嶺上開花だと？ リンシャンカイホー いかれている」

齒噛みしながら忌々しそうにおれをねめつけ、これまた嫌々点数棒をおれに渡すは、ヒンデウー教の創造神ブラフマーだ。せいせい！ そんな物騒な目でおれを見るな！ おっかない！

「これで三連続リンシャン……化け物ね」

「貴様、まさか詰んでるのではないだろうな？」

自動車でどうやって詰むんだよ……ブラフマーさん。

えー、取り合えず、ことのいきさつを簡単に説明しておこう。

さっそくですけど、おれ、死にました。

友人達と海に行つてサーフィンしてたら足つって、そのまま海に沈みました。あの息の詰まる感覚はもう二度と味わいたくないです、はい……。

それで冥府にいくらしかったおれを、宗教も国も違うこの神々は、麻雀の人数あわせという理由で、一時的にこの部屋にとどまらせている。

（まあ、別に、麻雀嫌いじゃないからいいんだけど……。というか、なぜに麻雀？）

このメンツの中で一人だけ人間と言うのは、針のむしろに座らせている気分だ。死にたくなってくる。

「面白いこと言うのね。あなた、もう死んでるじゃない」

「はははっ、そうでした。……って、アマテラスさん、ちょっといいですか？」

「ん？ 何かしら？」

「あなた、今、おれの心読みましたね？　読みましたよね？」

大事な事だから二回言ってみた。

アマテラスは露骨にしまった、と言う顔をして固まる。

「まさか、あんたら三人とも、おれのアガリ牌わかって打ってたな……」

他の二人にも視線を向ける。

「ひゅー、ひゅるるっ」

「……（ブイッ）」

二人ともそ知らぬ顔。なんて神様だ。

人間風情にこの神々は、読心術使っていやがった。

サイテーだ、こいつら。

神様なのに読心術使っていやがった。

大事な事なので（ry

「これでラス半（ラスト半チャンの略）でお願いします。おれ、もう疲れました」

「もう、そんなにすねないでよ、人間」

「別にすねてませんよ。ただ、神様ってこんなにペテン師だったんだと落胆はしてますけど。こっちは正々堂々打ってるのに……」

おれがそう言つと、おれの両サイドを固める二人の眉がピクリとはねあがる。

「大きく出たな、人間。我をペテンあつかいするとは」

「その発言、万死に値するぞ」

この二人、異様に沸点低い神様だなあ……。

神様ともなるとプライドも高そうだから仕方が無いのか。

「このラス半で人間、貴様が勝てれば、このオーデインの名において、貴様を蘇らせてやろう」

「ほう……いいんですか、オーデインさん。あなた、これまでの局全て、おれに勝ったことありませんよ」

「これで勝つ。ただし、貴様が負けたときは、死よりも恐ろしいバツゲームが待っていると心得よ」

「わかりました」

死よりも恐ろしいバツゲームってなんだろうな……？

—— 10 分後 ——

「ロン。タンヤオ、1000点」

アマテラスのロンで半チャンが終了。

結果、

おれ・35、000点

アマテラス・27、000点

オーディン・20、000点

ブラフマー・18、000点

「……くう、人間風情にこのざまとは、なんたる不覚！」

「あなたたち、馬鹿みたく危険牌捨てすぎ」

「アマテラスよ、貴様、いま馬鹿と言ったか。この俺に！」

まあ、確かにセンスが感じられない打牌ではあった。

おっと、ヤバイやばい。考えてることは全て筒抜けだった。

「それよりもほら、その人間を転生させてあげるんでしょ、オーディン。ここに来て嘘までついたら、あなたの神意が落ちるわよ？」

「わかっている！」

そう言っつて椅子から立ち上がりおれのことを見下ろすオーディン。
いや、だから怖いって。

「おい、人間喜べ。貴様を転生させてやる」

「はあ、どうも……」

「むっ、どうした人間。嬉しそうではないな」

「転生、なんて言われてもピンとこないだけです」

「人間は順応性が低いな。俺は数秒でどんな場所にもなじめると言うのに」

「そりゃあ、あんたが神様だからだろ……」。

「それで人間、どこかリクエストはあるか？」

「は？ もといた世界に戻してくれるんじゃないのか？」

「貴様の体は既に灰となっている。無理だ」

「いや、そこは神様の力でどうか……」

「無理なものは無理だ。考えても見る。灰燼と帰した人間が変わらぬ姿で現れれば、バランスが崩れるだろうが」

ああ、なるほど。確かに。

鬱だ……。

「どこでもいいですよ。魑魅魍魎のいる異世界じゃなければ、どこでも」

「……………ッチ」

舌打ちしやがった、この神様……。

送る気だったな、魑魅魍魎の居る世界に。

おれが半眼でオーディンを見ると、アマテラスがパラパラめくっていた本をこちらに出す。

「なら、こことかどう？」
インフスホットス『IS』の世界なんか」

「おお、それはいい。幸いにも人間は男。世間の底辺に埋もれて死ぬように細工しよう」

「ちょっと待て！ その世界だけはやめろッ！ 転生するにしてもその世界だけは絶対にいやだ！」

「どうして？ 上手くことが運べば夜の魔王として、このIS学園に入れるかもしれないのよ？」

「それはうまく運べばの話だろ！ 運ばなければ女尊男卑の世界で虐げられる生活をするんだぞ！？ というか、夜の魔王ってなんだよ！」

「虐げるは少し言いすぎな気がするけど。ああ、そうだオーデイン。あなたの権限で、この人間にチートを施してあげたらどう？」

「チート？ なんだ、それは」

「異常能力のことよ。そうねえ、この場合の例とすれば、男なのにISに乗れるとか」

「と言うか、アマテラスさん、なんでISとかチートとか知ってるんだよ。」

「それはね人間、私がアマの岩戸の中に引きこもってるときに、暇

つぶしとして読んでたからよ。F a t e / z e o とか、カ○ンとか、空の○界とか」

「あー、あんたが実は相当残念な神様だったことは理解した。だから黙っててくれ」

日本人がこんな駄神を崇めていた時期があったと思うと泣けるな……。

「で、人間。貴様はなにを望む。どんな異常能力が欲しい」

「いや、おれは別に――」

「なにもいらないうて言ったら、わたしの権限で、あなたを^{バーサーク}狂化させるわ」

「……」

「なによ、人間。わたしの提案に文句があるの？」

「いや、別に……。あんた、実はかなりの奈○信者だろ」

「そうかしら？ 別にそんなことは無いと思うけど」

そんなことあるだろ。狂化と書いてバーサークって読ませてる人間なんて奈。きのこしか知らんぞ、おれは。

「それがダメなら『十二の試練』トモ・ハンとかはどう？ 当分は死ななくてすむわよ」

「いや、別にISの世界だったらとつと死んで成仏したほうが気分的にラクだし。まあ、自殺はしないが。と言うかあんた、ただバーサーカーのクラスが好きただけだろ……」

「ええ、そうよ（ドヤッ）」

う、うぜえ……。

ドヤッうぜえ……。

「と言うことであなたのチート能力は『騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』に決定！」

「ちょっと待て！　なんでそんな攻撃的なチートなんだよ！　おれは別にISに乗るつもりなんて——」

なんか勝手に話が進んでいることに不満を感じたおれが、アマテラスに異を唱えようとしたときだった。

最下位の回数が一番多くて、そのことにショックを受けてジャン卓に突っ伏していたブラフマーがグワツ！　と顔を上げた。

「ええええええい！　五月蠅いわ！　つべこべ言わずにここから出て行け！　このキチ。イジャン師がああああ！」

ジャン卓を叩き割らん勢いで拳を振り下ろした瞬間、おれの足元に穴が開く。

「えっ——ちょおおおおおおおっ！？」

まさか、アマテラスがひきこもりだったなんて……（後書き）

感想とか誤字とか待ってるぜ！

まさか、天然チート姉さんが天然チート妹になるとは……

い、いま目の前で起こっていることを話すぜ……。

いいか、心して聞けよ!?

おれはなんと、赤ん坊になってしまった!

無事に転生できたようで、よくないよくない。ここ、重要。

うん、テンプレ通りすぎる。

おれの個人的な意見を言わせてもらえるなら、正直なところ、流産とかでとっと第二の人生終わらせたかった……。

転生するにしても記憶とか消してもらえばよかったと今更ながらに思う。

まあ、しかし、こうやって生まれてしまったのだから仕方が無い。後の祭りと諦めて、自殺する度胸の無いおれは、そのまま生きていくだけだ。

「だ……だあぁっ……」

うん、やはりこれぐらいしか発せられないか。仕方が無いよな。わかってたさ。

取り合えずだ、おれの今後の人生設計としては、絶対に、ゼー——
ーったいに！ 原作のメンバーおよびISと名の付く全ての事柄に
関わらないことだ！

関わりあいそうになったら即座に逃走！

回避不能で関わり合いになってしまったときは、完璧に彼ら、彼女
らとのコミュニケーションを拒み！

ISに関しては『モンド・グロッソ』のTV中継すらみない！

ふっ、ここまですれば完璧だろう。

ハハハッ！ どうだアマテラス！ 貴様の描いたおれの第二の人生
では、おれがお前からもらった能力『騎士は徒手にて死せず（ナイ
ト・オブ・オーナー）』で無双を繰り広げていたことだろう！

だがおれはその運命に抗ってやる！ ディステニィーブレイク！

「あら、おきたのね、千秋。よくねむれた？」

おれを優しく抱きかかえた母上は、優しく微笑みかけてくれる。

「だ！ だあああああつ！（はい、それはもうぐっすりと！）」

「そう、それはよかった。あなた、千秋が新しいベッド気につてくれたみたい」

はい、それはもう気に入りましたとも、このベビーベッド。生前は長身すぎて普通のベッドが狭かったからな……。

にしてもおれの新しい母親は美人だ。美人すぎて授業参観のときとか緊張しそうだ。

うん、前言の前言ぐらいを撤回。

転生さいこー！

「そうか、それはよかった。おーい、ちあきいー。パパですよ」

「だぁあっ!」

ハハハッ、親父殿も中々のナイスガイだ。そのヒゲ、いかしてますよd(、・ω・、)

ああ、神様、仏様、天使様。

どうやらおれの第二の人生は、生前のときより大分楽しそうです、マル。

「あら、千冬ちゃんも起きたみたい」

「そうか。いやあ、千冬もかわいいなあ。これは将来、母さんに似て美人になるぞお」

「もう、お父さんたら。当たり前でしょ」

.....。

.....。

.....。

（ 。 ♪ ） ポカーン。

（あれ？ いまおれの耳に、ブラックワード中のブラックワードである『ちふゆ』の三文字が聞こえた気がするなあ……）

いや、気のせいだって……。

うん、きっと同名の人だって。あれだよ、生徒会の。存の方の千冬ちゃんだよ、きっと。いや、あれは千冬じゃなくて真冬だったな。うる覚えだなあ、色々と。

兎に角、こんな初っ端からそんな第一級警戒人物と言う名の天然子
ト姉さんと遭遇するわけ――

「ほら、千秋。おまえの妹の千冬だぞお。かわいいだろ」

親父殿に抱きかかえられて母上の腕の中に居る赤ん坊と対面させら
れる。うん、赤ん坊だ。そしてほんのちよっぴり生えてる髪は黒だ
……。

ああ、鬱だ……。

「いわなくてもわかってますよ、きつと。だって二人は双子なん
ですから」

「ははは、それもそうだな」

そう言って二人は大きく笑う。

前言撤回だ。

転生サイテー……。

アマテラスめ。おれが原作メンバーと関わり合いにならないように行動することを見越して、異性一卵性双生児なんて世界でも指で数えられるぐらいしか事例のない裏技を使っておれを強制的に原作に関わらせるとは！

（あのおんなあああつ！）

「ダアアアアアアアツ！」

「ど、どうした千秋！？ ごはんか？ それともしっこか？」

いいえ、親父殿。おれが叫んだのは、天上で今頃笑いこけているだろうアマテラスが憎いからです。

どうやらおれの原作干渉は、回避困難な道になりそうです、マル。

まさか、天然チート姉さんが天然チート妹になるとは……（後書き）

うん、短い！

短すぎる！

1000文字前後じゃあ短いな！

さて、これからどうしようっかなあ……

まさか、こんなに早く兄離れするなんて……（前書き）

少し遅くなりましたが、あけましておめでとうございます。

ことしもよろしくおねがいします。

久しぶりにパソコン開けて、え？　ってなった作者でございますです。

私は目を疑いました。

総合評価1,000点オーバー？

やつほーい！　と作者が叫んだのはここだけの話。

今後も遅めの更新ですけどがんばっていきますんで、よろしくおねがいします！

まさか、こんなに早く兄離れするなんて……

はい、みなさんこんにちは。

織斑 千秋です……。この名前で自己紹介するのは初だな。文面では普通にしているが少し違和感があるな。まあ、すぐに慣れるだろ。

さっそくですがおれ、こんどダイブ・テウ・ザ・ブルー（投身自殺とも言つ）でもしようかと思えます。

理由？ そんなの決まってるさ――

「お兄ちゃん、えほんよんで」

おれが家のソファに座ってテレビを見ると、とことこと音が聞こえそうな足取りで千冬ちゃんが来た。

彼女が、親ではなく、おれに絵本を読むようにねだってくるのはなぜだろうか？ まあ、いいんだが。

「ああ、いいよ」

「やった♪」

おれのオーケーをもらった千冬ちゃん。満面の笑みを浮かべておれの隣に座る。

おれの妹こと織斑千冬（3歳）。時間が大分跳んでいるが気にしないでくれ。赤ん坊時代の描写なんて、誰が好む？——というか、あの時代はおれにとっては黒歴史そのものだ……。

考えてもみてくれ。大学まで行った青年（麻雀好きだからっておじさんにあらず。ここ重要。超重要！テストにでるぞ！）がその意識を保ったまま赤ん坊になる。

するとだ、何が起こるか……。

まあ、正確な名称その他もろもろは割愛させていただいて、ここは一まとめに赤ん坊の生理現象と言っておくが、その生理現象が恥ずかしいの何のって……。とくに両親にお尻見せるところなんてトラウマになりそうぐらい恥ずかしかった……。

おれはそのとき、渋谷のスクランブル交差点のど真ん中で愛を叫んだほうが幾分か気がラクなことに気が付いたんだ。これ、おれの

今世紀最大の大発見。

——閑話休題。

まあ取り合えず、この子、武術だけじゃなくて頭もいいようです。既に日常会話がなりたってます。まあ、二十四歳でIS学園の教師やれるんだから少なくとも悪いはずがないのだが……。

と言うかおれは前の意識がそのままあるから兎も角としても、3歳で普通に会話成り立つって、恐ろしいな……。

——で話を戻して、なんでおれがこんど投身自殺するかというと……。

（ちっちゃい千冬ちゃんが可愛すぎて生きていくのが辛いです……
（ノド、）シクシク）

これをギャップ効果と言っただろうか？

辛辣な言葉と出席簿（と言う名の青龍刀）が武器の、『人間やめましたシリーズ』なんて目じゃない新たな項目、『チート人間始めましたシリーズ』の元祖こと、織斑千冬だが、それら全ての暴力的スキルを駆逐、排除、デリートし、歳相応に幼可愛らしい笑顔、矮

軀、移動音にとことんと言つ擬音をつけてみる？

まさに今の千冬ちゃん是人畜無害な小動物みたいに見えるんですよ。実際に人畜無害ですが。

だから、この思い出をそのまま胸に抱いて死にたいです。むしろ死なせてください、お願いします……。

(……いや、待てよ)

千冬ちゃんにえほんを読んでいるおれはふと閃いた。ニユー。イプ並みのひらめきだ。キュピーン

(そうだ、彼女を篠ノ之束に関わらせなければいいんだ！)

あの天才(天災でも可)には悪いが、今の千冬ちゃんがあそこまで擦れてしまった(？)のは篠ノ之束が原因の大半を占めているとおれは思う。いや、それだけじゃないんだが。

(たしか原作では、二人が出会ったのは高校からだっ たな)

フフフッ、ならば、

（防いでみせよう、千冬ちゃんの未来のためにも！）

そしておれの平穏無事な生活のためにも！

こうしておれば、原作介入回避への具体案を考えたのだった。

○

ああ、時の流れとは早いものよの……。

ちわっす、織斑 千秋（6歳）っす。

口調が変だつて？

まあ、それは乗りだから気にしない。次から戻るから。

あれから3年……。

3年前は「お兄ちゃん」と言ってくれた千冬ちゃんもおれと同じく6歳……。 (双子だから当たり前なんだけど)

ち、千冬ちゃんがおれのことを「千秋」と呼ぶようになってしまいました……。

お兄ちゃん、とっても悲しい。。。(ノロノロ)。

そのまま「お兄ちゃん」と呼んでおくれ。おれのことを「お兄ちゃん」と……。

まあ、4歳後半から、おれのこと名前で呼ぶようになったんだが、やっぱり「お兄ちゃん」と (ry

さて話ががらりと変わって悪いんだが、取り合えず千冬ちゃん怖いよ。

何が怖いつて？

そりゃあ、あれだよ、統率力だよ。

この年齢で居る場所と言えば幼稚園なんですけどね、うちの妹の千冬ちゃん、統率力がばないっす。（あ、戻った）

先生以上に園児たち纏め上げる園児ってどうよ……？

怖いったらありやしない。

だって既に原作の片鱗を見せ始めてるって、脅威以外の何ものでもないぞ。

（おい、先生……あんたはそれでいいのか？ 園児に統率力で負けて）

と、おれは園児たちからちょっとだけ興味を示してもらい、あとは全く遊ばれずに不ぞろいなまま放置されて可哀想なルービツクキユーブを力チャ力チャ回しながら、優しい顔した先生の横顔に視線を移した。

（うん、気にしてないみたいだな）

むしろこの状況を喜んでるように見えた。そりゃあ、仕事が減って楽だろうな。

（さて、全面そろった）

3×3でおよそ二分半。全盛期の頃から大分タイムが落ちたなあ。

いやあ、この幼稚園こう言う暇つぶしの道具が多くて助かる。知恵の輪とか、ルービックキューブとか、エトセトラとか。これらのパズルは、おれがこの幼稚園に入ってからからの相棒となっている。

いや、大学まで行った人間が園児と一緒に遊ぶとか無理だって。

おれも小さい頃はこんなこととして楽しかったんだなあ、と懐かしみの心はあれど楽しいとは思わん。

千冬ちゃんとか他の子どもがたまに遊ぼうと誘ってくるが断っている。ごめんね千冬ちゃん。おれがそっちの輪に入ったら、確実に空気が壊れるだろうからさ。許して。

(さて、次は4×4に挑戦するか……)

おれは横に積んであるルービックキューブに手を伸ばす。

スカッ。

(ん?)

スカッ。

「あれ？」

ここにあつた4×4ルービックキューブどこいった？

(と言うか、5×5、6×6、7×7もねえし)

誰かが持っていたのか？

まあ、7×7なんてなかなかお目にかかれない代物だから、それ

だけで園児の興味を引くだろうけど、まさか、人の横にあるものを無言で拝借する失礼なヤツがいたとはな。

（おれもおれでなんで気づかなかったんだろうな、持ってたことに）

じゃあない、知恵の輪でも持ってくるか……。

おれは立ち上がり、教室にあるおもちゃ箱へと向かおうと体の向きを反転させた——まさにそのときだった。

目の前にズイっと7×7のルービックキューブを突きつけられる。

目の前に来すぎて持つてる人間の顔が把握できない。

（てか一面そろってるし……。おれがやろうと思ってたのに）

と言うより、園児の頭脳で7×7を一面でもそろえるとは、なかなかすごい子どもがいたものだ。

これは未来の『ルービックキューブ世界選手権』の日本代表になれそうだな。きっと優勝間違いなし。

そんなこと考えたら、高校にあった『ルービックキュー部』の後藤を思い出した。あいつ、いまごろ何してんのかな？

彼はその異常な腕前から『ルービックキューブキチ』と呼ばれていた。まあ、それは、彼の努力が生み出した結果だから、キチとつけるのは失礼だと思うが。

（しかし、この子はすごいな。まさにてんさ——）

そのときだ。

おれの背中からナイアガラ滝の滝を彷彿とさせる量の冷汗が出てきた。それはもうびっちょりと……。

ま、まさか……。

「へ、へーん。東さんのかちゅ」

調子のいい声が聞こえた。

ルービックキューブがずっと横にずれる。

そして現れたのは、なんかどっかで見たことあるようないなような顔と髪の色をした園児だった。

「……………」

「ん？ どうして絶句してるのかな？ ああ、なるほど。東さんのすごさに感激しすぎたんだね」

……………き、きつとこれは何かの間違いだ。

だって彼女と千冬ちゃんは、高校で出合ったって原作にあっただる。いや、おれの記憶も曖昧だから一概にそうとも言いきれないが。

きつと同名の人だ。

おれは一抹の希望にすがり、彼女の左胸にある名札を見る。

しのの たばね、と書いてあった……。

そんなもって彼女の少し後ろを見てみると、他の4×4、5×5、6×6が床に置いてあった。

「んじゃ、またねえー」

ルービックキューブをおれに押し付けて、彼女は千冬ちゃんたちが遊んでいる輪へと走り去っていく。

おれはその後姿を呆然と追っていた。

後で確認したが、彼女が持っていたと思しきルービックキューブ四つは、全て全面そろっていた。

蛇足であるが、今はお弁当を食べ終えたお昼休みだ。

そして、そのお昼休みが始まって5分も経っていない。

今のおれの気分は、初っ端から親の倍満に振り込んだぐらいブル

ーだ。残り持ち点1、000点。

まさかこんな早期から束ちゃんに出会ってしまうなんて……。

どうやらおれの原作回避計画は、困難を極めそうです、マル。

まさか、こんなに早く兄離れするなんて……（後書き）

さて、この後どうしよう……。
誤字脱字とか待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8215z/>

神様たちと麻雀打ったらISの世界に転生ってどうよ.....?

2012年1月7日01時52分発行